

◆書評◆

神谷悠介著

『ゲイカップルのワークライフバランス
男性同性愛者のパートナー関係・親密性・生活』

(新曜社 2017年 ISBN:978-4-7885-1538-3 2900円+税)



三部 倫子

(石川県立看護大学 看護学部)

本書は同居するゲイカップルへのインタビュー調査から、かれらのパートナー関係、親密性、仕事と生活（職業生活と家庭生活）を分析、記述する質的研究であり、特にかれらのワークライフバランスの取り方やそこで生じる葛藤に主要な関心が置かれている。「男性同性愛者の生活者としての素顔、ワークライフバランスのあり方を浮き彫りにして、異性愛を中心とする親密性概念や家族研究の限界を超えて、セクシュアル・マイノリティの婚姻に基づかない多様な関係性を探究したい」（2頁）とする本書は、家族社会学にとどまらず、ジェンダー研究、クィア研究に興味をもつ読者それぞれに、新たな視座をもたらすものである。

既存の異性愛夫婦を対象とする家族研究や、レズビアンやゲイカップルを対象とするクィア研究を先行研究としてまとめた後、本書は家計の独立とパートナー関係（第4章）、消費者行動としての家事の外部化（第5章）、家事分担と仕事役割（第6章）、生活領域と＜分かち合う親密性＞（第

7章）、職業生活への精神的サポート（第8章）、民主制としての意思決定プロセス（第9章）と続き、親密性とワークライフバランス論の課題（終章）を述べて終わる。

質的調査による研究の成果は、統計的手法によって支えられないため、データが必然的にもつ「偏り」を念頭に読み進める必要がある。そこで、まずは本書が誰を前提に論じているか（調査対象者）を明らかにしておきたい。本書のインタビュー調査は、2007年6月から2010年10月の期間（今から10～8年ほど前）に実施されている。調査対象となった「ゲイカップル」（但し、バイセクシャルや「たまたま付き合った人が同性」という者も含む）は、東京圏在住の20代～30代を中心とする10組で、調査対象者表（54頁）を見れば正社員で長時間労働、働き盛りの世代であることがわかる。子どもを育てたり、高齢者や障がいのある人の介護・介助など、家庭内でケア労働をしている者はいない。

彼らの「ワークライフバランス」を論じていく際、基盤となるのは＜親密性—生活

モデル>である。このモデルは、職業生活からパートナー関係への影響に加えて、(男性同性愛者がスティグマを負う日本社会からの偏見や差別を無視できない) パートナー関係から職業生活への影響の双方をみるというものである(43頁)。本書の冒頭に枠組として提示されていないが、もう一つ重要なのはDoing Genderアプローチである。これは「日々の生活のなかでジェンダーがいかん生成されるのかを分析することで、自己や他者にとってのジェンダーの意味づけをとらえ」(170頁)ようとするものである。ゲイカップルによって実践されるジェンダーを浮かび上がらせるために、男女のカップル、女性カップルに関する先行研究も適宜引用されている。

多岐に渡る本書の知見全てを紹介できないため、本稿では家計組織、消費者行動、ジェンダー実践の3点に関する事例を紹介し、最後に本書の意義と課題について触れたい。

著者によれば、ゲイカップルの家計組織は独立型(つまり共通の財布を持たない)場合が多いとされる。ここから皮肉な結果として、所得格差が大きいにもかかわらず合算型の家計組織ではないため、生活の中で如実に差が生じているカップルが登場する。もちろん、所得格差は男女カップルに存在するが、ここで紹介されているカップルのように夫が新幹線通勤する傍ら、妻は在来線で通勤するということは考えにくい。(現状では)婚姻できず、一方が他方を扶養に入れる制度上のメリット(選択肢)がないためこのようなことが行われるのか、もしくは、男性は稼いで当然だとす

るジェンダー規範がそうさせているのか、興味を掻き立てられる事例である(64-74頁)。レズビアンカップルは収入が共同の場合と個別の場合に等しく別れているという先行研究が紹介されているが、そもそもの男女の収入格差のせいで、女性カップル二人で合算型財布を持たなければ生活が立ちゆかない場合が多いのではないかと等と、著者の分析を読みながら様々な角度からデータを分析してみたくなった。

次に、消費者行動に関連する事例をみてみよう。家事分担で生じる葛藤の対処として、裕福なカップルが家事を外外部化するケースが分析されている。このカップルは長時間労働かつ高収入であり、必然的に家事をする時間をもつことができないのだろう。家族責任として家事(育児)をするのが当然とみなされる「女性」ではないからこそ、家事の外外部化に抵抗感が少ないのではと著者は分析する(114頁)。別の側面から考えてみると、裕福な男性が家庭外の女性労働力を安く購入するという構造的なジェンダー問題の一端ともいえそうだ。

これまで紹介したこととやや重なるが、最後にジェンダー実践に着目したい。家庭内での家事責任が外部化される一方で、「男性」がすべきこととして対比的に強調されているのが、稼ぐことである。少額でもよいので「男性」であれば稼ぐべきだという意見や、生活費を平等に負担できない側の「引け目」等が稼得役割と絡めて論じられている。このような結果から、男性同性愛者自身も異性愛の性別役割分業をモデルとする社会に、埋め込まれて生活していることがうかがい知れる。本書を通して

ジェンダー規範（「男は稼ぐべし」）によって所得の低い側が引け目を感じたり、逆に「家事担うべし」とする規範から距離を置きやすいため（高い所得があるという限定つきではあるが）家事を外部化する傾向があるなど、男性カップルの語りからジェンダー規範との交渉をみてとることができた。「男性カップルはこうすべきである」というロールモデルが不在のため、かれらは何事も交渉しなければならぬと著者は分析する。「男」しかいない世帯なので、「女（妻）」なんだから家事をしなくては」「女（妻）には家事をして欲しい」という役割期待や役割葛藤を抱えにくい側面があるのだろう。翻って、ロールモデル（「妻（夫）は〇〇すべし」）があるがゆえに、男女のカップルが抱える対話の難しさもまた逆照

射される。

ジェンダー規範や同性愛に対する差別偏見などを挿入しながら、ゲイカップルの生活を分析する本書はなるほどと膝を打つような面白い発見が随所にちりばめられている。ものたりなさとして強いて言うならば、働き盛りでケア責任を担わないゲイカップルと、高齢者や子どものケア責任を担っている（だろう）男女カップル（特に女性）の先行研究とを対立的に比較してよいのだろうかという疑問が残る。子育てをするレズビアンカップルの研究のなかには、子どもを生んだ側の労働時間が短くなるという研究結果がある。このように考えると、本書に限らず、ケアという重要な視点を入れたクィア家族研究が、質・量ともに今後求められているといえよう。

（掲載決定日：2019年5月29日）